



YA セミナー特集号

<目次>

2025年2月3日 LIVE オンライン開催

2月6日～3月10日アーカイブ配信

「若者は読書しないのか！？中高生世代の読書実態と公共図書館担当者に期待すること」

- 開催報告 鹿野詩乃
- YA セミナーを受講された方から
 - 『若者は読書しないのか！？中高生世代の読書実態と公共図書館担当者に期待すること』
に参加して 片田あゆみ
 - 飯田一史さんのセミナーを受講して 富田淳
 - 「居場所とは？」「読書とは？」 服部紗香



開催報告

児童青少年委員 鹿野詩乃

2025年2月3日に、ルポライター飯田一史さんを講師にお迎えし、「若者は読書しないのか！？中高生世代の読書実態と公共図書館担当者に期待すること」と題した YA セミナーが開催されました。また、2月6日～3月10日まではYouTubeによるアーカイブ配信を実施しました。

今回のオンラインセミナーは、出版や読書、児童書についての著作の多い飯田一史さんに、中高生、特に高校生は本当に読書をしないのか、そして中高生が求めているものとは、というテーマでお話いただきました。多岐にわたる、内容の濃いものとなったセミナーでしたが、この報告では、特に公共図書館に関わる内容を中心にご報告します。

「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」でも、子どもの不読率は常に話題にされています。特に高校生の不読率は、2022 年度調査で 51.1%、2024 年度調査でも 48.3%です。本好きな人、本や活字に抵抗のない新聞など各種メディア、図書館関係者など、本に関わるわたしたちからこの数字を見ると、「半分程度の高校生は、1 か月間に 1 冊も本を読まないのか！」とその不読率に驚くかもしれません。高校生は忙しいから、スマホばかりしているから、などと理由をつけたくもなります。しかし、本当に高校生だけが本離れ・読書離れしているのでしょうか。飯田さんは様々なデータから、高校生だけが読書をしていないわけではない、データを読み取る側のリテラシーや先入観に問題があることを示してくださいました。

また、実店舗の書店が減少している今、図書館が果たす役割は大きい、と飯田さんは言います。では、中高生に公共図書館を利用してもらうにはどうしたらいいのか、海外の例を中心に、飯田さんが提示してくださいました。

- ・図書館離れの原因に、施設の整備不良(建物・蔵書・ネット環境が古い・汚い)という理由があったのではないか。

- 整備した結果、利用率があがった例も。

- ・北米の図書館は、10 代にとって「目的が無くても来て良いところ」と認識されている。

- ・読書だけではなく、さまざまなアクティビティで図書館を利用してもらう。

- 「たまり場」としての図書館の価値を再認識させる。学校図書館にはない企画を公共図書館から提案してはいかがか。

- 公共図書館の利用案内やイベント告知を、学校で行うと広く伝わる。

- ・図書館司書の TicToker。

- 図書館や司書の魅力を、SNS などで発信する。

- ・中高生が探しやすい、手に取りやすい書架を用意する。

- ・中高生は待てない。予約までして読もうと思わない。

- ・従来の読書にとらわれず、「読書」観を拡張する。

- ビジュアル重視の本、電子書籍、オーディオブックなど聞く読書など、様々な資料形態による読書の案内や提供も必要。

では、中高生が実際に手に取り、読む本とは何でしょうか。飯田さんからは、人気作とその特長や傾向を教えてくださいました。中高生である思春期の若者の一般的な傾向を考えると、中高生が求める読書に対するニーズは 3 つある、と分析されています。

- ① 正負両方の感情に訴えるもの

- ② 読みやすくわかりやすく、読む前から感情がわかるもの

- ③ 自意識、大人への反抗心、不満など、モヤモヤした思春期世代の心情に寄り添うもの

これらのニーズを満たす作品こそ中高生の読みたいもの、つまり中高生の人気作になるのです。セミナー内では、具体的な作品名も挙げて詳細に説明していただきました。

現代の中高生も、本を読みたい気持ちは失っておらず、そのニーズも変わっていない、と飯田さ

んは分析します。またスマホだけが読書時間を奪うのではない、とも教えてくださいました。むしろ、情報源が SNS などのスマホ経由であることに注目されています。Web 発の読書機会の提供を公共図書館でも案内する、などスマホと読書の相互活用を提案されました。

最後に、飯田さんが断言していらしたのは「10 代の読書は大丈夫ですよ！」ということ。飯田さんは、国の政策や家庭環境、図書館現場の尽力もあり、日本の子どもの読書環境は改善されている、といます。新しい「読書」観や「本」の形態もある中で、公共図書館は、一人一人がもっと身近に、自由に、安心して本や図書館という場所に親しめるところであってほしい、と願いを託されたセミナーでした。

飯田一史さんによる今回の YA セミナーは、申し込みされた方には、アーカイブ配信も行いました。事前アンケートで伺った質問と飯田さんからの回答を追加したレジュメも、公開しました。当日参加された方、アーカイブ視聴された方は、公開されたレジュメもあわせてご覧ください。

LIVE でのセミナーとその後のアーカイブ配信に、多くの方々が参加頂きましたことに感謝いたします。



『若者は読書しないのか！？中高生世代の読書実態と公共図書館担当者に期待すること』に参加して

公共図書館職員 片田あゆみ

私は図書館に勤務し 2 年目となる職員です。児童サービスや YA サービスに携わり、日々慌ただしく過ごす中、同じ図書館に勤務する先輩の勧めと、飯田先生のご著書『「若者の読書離れ」というウソ』を拝読したことで、このセミナーに興味を持ち、参加させていただきました。

内容は 3 部構成で、大まかな内容としては、①各種調査の統計などを用いて「若者の読書離れ」というフレーズが正しくないことを指摘します。さらに②欧米の読書・図書館調査などから、10 代の読書や図書館に関する世界的な傾向を探るとともに、多様な形態の読書が必要であることを示します。そして③実際に 10 代が読んでいる本を「中高生の 3 大ニーズ」や「ニーズを満たすための 5 つの『型』」に分類することで、読書傾向が明らかになります。

セミナーの中では、新しい発見や共感できる点が多くありました。中でも特に印象に残った内容を 3 つ書かせていただきます。

まず、10 代の読書実態の調査から、「高校生以上の読書推進は難しい」ことが判明します。これは子どもの読書活動を推進する立場としては衝撃的に感じました。小中高生を対象にした各メディア

アの利用時間を答える調査からは、「調査年や年齢によってスマホの利用時間が伸びているが、本を読む時間は一定である」ことが読み取れ、飯田先生は「スマホですら減らせない読書量を外からの働きかけで増やせるの？」という問いを投げかけます。たしかに、メディアとともに世の中の情報量が増える中、読書量を増やすことは難しいと感じます。しかし同時に、どの世代や年齢でも本を読む時間が減っていないということからは、どの時代も一定割合の「読書ファン」がいるとも考えられます。中高生に向けた図書館サービスについて、小学生までのような世代全員に向けた取組の難しさを感じるとともに、一定割合いる「読書ファン」に向けた取組も必要であることが、データからも理解できました。

続いて、飯田先生は海外の統計調査などをふまえて、「読書」観を拡張することが必要だと語ります。「読書」と聞くと紙の本をイメージしがちですが、最近では電子書籍やオーディオブックなどもあり、自分に合ったスタイルを選ぶことができます。飯田先生は、ディスレクシアや人の認知特性（「視覚優位」「聴覚優位」など。本好きの多くは「言語優位」なのではないか、とのことです）のような、その人の特性次第で読書のしやすさに差があるため、図書館でも様々な形態の本を提供すべきだ、と説明しています。私はこの話に大変共感しました。お恥ずかしながら、私も高校生以降、あまり本を読まなくなった人間の1人です。図書館に勤めてからは再び読書好きになりましたが、高校時代に読書習慣がなくなって以来、本に向かう集中力がなくなり読書がしづらく感じていました。私はまさに「視覚優位」と「聴覚優位」で、映像や音の方が頭に入りやすい特性です。おそらくですが、日常的に動画などを視聴している多くの人が「視覚優位」や「聴覚優位」なのではないでしょうか。図書館員としては、多くの人に「紙の本」に親しんでもらいたいと感じますが、一方で中高生の読書活動推進の難しさ乗り越え、読書のすそ野を広げるためには、マンガや電子書籍・オーディオブックなどを提供することも必要かもしれません。

さて、先ほど中高生世代の「読書ファン」について書きましたが、「読書ファン」はどんな本を読んでいるのでしょうか。一方、読書のすそ野を広げることは大切だという説明もあった中では、どういった選書をすればよいのでしょうか。そのような疑問が湧いてくる頃、飯田先生から「中高生の3大ニーズ」や「ニーズを満たすための5つの『型』」についてのお話がありました。詳細は割愛しますが、物語の設定やストーリー展開などによって、中高生が好んで読む本のタイプを分類し、タイプごとに共通する特徴を示しています。特に「型」の分類は、2つの意味で選書に役に立ちそうです。1つは、「型」に当てはまる本を選ぶことで、「読書ファン」の中高生がきっと手に取ってくれるであろうこと、もう1つは5つの「型」について偏りがないように選ぶことで、より多くの中高生が手に取りやすい本棚になるということです。選書にあたってはその両方が重要であると感じました。

以上、長々書いてしまいましたが、それほど大変有意義な時間でした。またこのようなセミナーがあればぜひ参加したいです。最後までお読みくださった方、ありがとうございました。



飯田一史さんのセミナーを受講して

さいたま市立北浦和図書館 富田淳

今回の飯田一史さんのセミナーを受講して、いかに自分が思い込み(というか呪縛)にとらわれていたか痛感した。

例えば、YA 世代の読書離ればかりいうが実は大人もろくに読書していないかったり、読解力・国語力は大きく悪化していなかったりといった指摘は、「そうなの？」と驚きつつ、自分では何も調べようとせず、巷の風聞を鵜呑みにしていたことに気づかされた。特に、私たちはいままで高校生の不読率の高さを憂いて方策に苦慮してきたわけだが、方策をいかに打とう不読率は大きく変わらないうというはなかなか衝撃的である。が、実のところ、こうした指摘に「やっぱり…」と思う人も多いのではないか。

では何をやっても無駄なのかというと、そうではないというのがセミナーの後半である。紹介された海外の図書館の取り組みや YA 世代が読んでいる本の傾向は、図書館の読書活動の今後の展望を提示してくれているように感じた。問題なのは、私たちの古い読書観のほうなのだ。

読書好きかどうかは遺伝によってかなり左右されるという行動遺伝学による議論の紹介もあったが、換言すれば、遺伝によってすべてが決まるわけではないということだ。それと同様に、いままでの方策が現状維持の効果しかないのなら、それを前提として、面白そうな新しいことを堂々と試す口実になるのではないか。

日頃感じていた頭打ち感を打ち破ってくれるような、とても爽快な気分になるセミナーだった。



「居場所とは？」「読書とは？」

都城市立図書館 服部紗香

YA サービスに関わる私にとって、自館に足りない要素や課題を考えるのに、たくさんの手がかりをいただける内容でした。

まず、若者の読書率は昔とそう変化がないことを、さまざまなデータを見方とともに解説していただき、目から鱗が落ちる思いでした。また、若者が好む本の傾向を深く分析されており「若い子は悲恋ものが好きだけど、なぜ？」というずっと抱いていた疑問が解けました。その際挙げられた「中高生の3大ニーズ」と「ニーズを満たすための5つの型」は、非常に納得のいくものでした。

諸外国のアンケート等の結果からは、若者が、図書の利用だけではない居場所としての図書館を欲していることがわかり、近年、日本の YA コーナーに求められているものと共通していると感じました。自館も「自由に過ごしていい、ふとしたとき、行ってみようと思える存在」になれるよう、選書や

展示を考えて運営してきたつもりでしたが、外国の取り組みから、できていないこと、これからできることがまだまだたくさんあると気づかされました。

図書館員として、やはり「本を読んでほしい」という気持ちが少なからずあります。選書は、環境づくりに大きく関わる部分ではないでしょうか。古い読書観を捨て、多様な読書の形があることを前提に、今の子たちに寄り添った、読書の裾野を広げるための選書をし、手に取ってもらえる工夫をしたいと思いました。

自館が目指す「居場所としての図書館」に近づけるよう、これまでのサービスを検討しながら、セミナーで得たことを活かしていきたいです。



過去に開催された YA セミナーを紹介します。

第 1 回目は、「学校図書館の現場から公共図書館の YA サービスに期待すること」(報告記事は『図書館雑誌』2021 年 3 月号)、第 2 回目は「これからの公共図書館の YA サービスを考える」(報告記事は同 2023 年 5 月号)でした。

YA セミナーについて、こんなテーマを希望しているといったご提案がありましたら、児童青少年委員事務局(jidou@jla.or.jp)までどうぞ。次回の開催を、お楽しみに。

News Letter no.32 ニューズ・レター

編集:鹿野詩乃、高橋樹一郎

発行者:島 弘

発行:日本図書館協会児童青少年委員会

日本図書館協会児童青少年委員会事務局 三浦敬子

Tel.03-3523-0816/Fax.03-3523-0841

E-mail:jidou@jla.or.jp